

会長就任のご挨拶



作井 誠 太*

(1) 今回はからずも皆様のご推挙に依り、古い伝統を持つ大学会であり、また恩師故依国一先生を創立者の一人とする日本鉄鋼協会の会長に就任させて頂くことになり、誠に光栄に存じます。非才の私には身に余る重責であります。会員の皆様のご好意とご指導により、2年の任期を全うすべく微力を傾けるつもりであります。よろしくお願い致します。

(2) 当協会の運営については、歴代の会長と諸先輩のご努力により、進むべき大道が立派に敷かれています。中野前会長はその大道について会員の輿論をアンケートされ、その結果会員の皆様がそれを支持して居られることが明らかになっています。もちろん個々の事業については批判、改善意見、要望が寄せられて居りますので、それに沿って当協会は努力致します。ただ恐れるのは当協会がその大道を惰性的に安易に歩き、その行動に新鮮さを失うことでもあります。

(3) 私は日本鉄鋼協会が好きであります。学校を出て以来、研究室の中でひつそりと暮しております私は、当協会の理事会や委員会で、鉄鋼生産の第一線から駆けつけて来られた方々が発散される活気にふれ、また生産人の卒直な友情に接し、絶えず鉄鋼研究への情熱を掻き立てられて参りました。また工場の現実の生々しいデータを知り、時には新らしい技術の要点を教えて頂きました。これらの刺激とデータがなくては、どうして大学で工学の研究ができるのでしょうか。これを裏返せば、大学の基礎的なまたは学際的な研究を背景に持たない現場の技術は、それが如何に壮観であつても、切り花の見事に過ぎないでせう。

友情の上でも、鉄鋼技術の研究の上でも、当協会は両者交流の中心でなければなりません。これが当協会の最大の使命であると私は信じています。

以上の両者交流の便宜は、当協会の特定の役員や委員の特権ではなく、全会員のものでなければなりません。会員同志が鉄鋼の科学技術の話題を自由に交換できる場を、ひんぱんに提供するという意味で当協会は全会員に対して「開かれた協会」、「対話**のある協会」であることを望みます。

(4) 現在の科学技術の開発は、すべて国際的な関連と規模の下に行なわれていますので、当協会は在来から世界各国との交流に努めて参りました。量的には見事に高度成長をとげて参りましたわが国の鉄鋼業も、心を空しくして世界各国から学ばねばならぬものを、少なからず持つています。私は以前に始めて海外に出て、多数の大学と研究所を見学した時の強い感想を今も忘れません。最新鋭の工場や設備もさることながら、それを生み、かつ育てた環境と哲学に深く感動致しました。

明治維新以来、100年のわが国の鉄鋼業発展の歴史を見て、先進国から得た指導と好意を思えば、わが国もまた誠実と善意を傾けて、新興の鉄鋼業を、育てようとしている国々に対して科学技術の奉仕に努めるべきでありましょう。鉄鋼の科学技術を通じての永遠の世界平和、これこそ当協会の熱い祈りであります。

(5) 過去10年間のわが国の産業の成長振りは、世界を驚かして参りましたが、各方面に行きつまりを生じ、産業は高度成長から安定成長への移行を目指し始めました。鉄鋼業においても、世界の各地から原材料とエネルギーを豊富に入手できる時代は去り、省資源と省エネルギーを目標に大きな転換期を迎

* 日本鉄鋼協会会長、東京工業大学名誉教授 東京理科大学教授

** ノーベル賞の江崎氏も研究におけるダイアローグの重要性を指てきしている。

えています。また鉄鋼業とは限らず、人類のあらゆる問題は環境問題を抜きにしては考えられない時代に入っています。これに対して政治的、経済的な対策を、短期、中期、長期を目標に、慎重に比較衡量しながら推進して行くべきですが、最後に鍵を握っているのは科学技術であります。このことは科学史を見ても明らかで、政治家の権力でもなく、財界人の富力でもなく、一介の技術者の発明によつて、鉄鋼業は度々の飛躍を重ねて参りました。

私が大学を出てからの 44 年間に、平炉が LD 転炉に変わり、連ぞく鑄造が普及し、高炉の燃料比は著るしく低下し、各種の熱管理が大きく進歩するのを眼のあたりに見て参りました。これらはいずれも省エネルギーの線に沿つた技術開発であります。今後さらにエネルギーの多角化、新エネルギーの導入、エネルギー使用効率の向上などによつて、現在の転換期を見事に乗り切るものと信じます。当協会もこれらの新技術の開発に、全力をあげて協力するものと信じます。

(6) 卒業後 44 年と申しましたが、その間の鉄鋼の科学技術の発展はすさまじく、革新の連ぞくであります。転位論、電子顕微鏡、LD 法、連ぞく鑄造、連ぞく圧延、超大型高炉その他は、私の卒業当時には存在していませんでした。しかし実験室の窓からこれらの華々しい発展を眺めておりますと、一つの感想が浮びます。それらのほとんどが日本において創造されたものでないという残念さであります。

日本の科学技術に創造性が欠けている原因については、近時盛に議論されていることは、皆様の御存じの通りであります。わが国の工業が西欧より 100 年おくれで出発したため、おくれを取戻すことに専念して、基礎研究—応用研究—実用化研究の王道をたどることができず、それぞれの段階を外国からの導入技術で間に合せたため、わが国では創造性を正當に評価する必要がなく、そのような習慣が生れませんでした。また島国の単一民族の特性として、思考の形式に多様性がなく、たとえばわれわれの日常生活も他人と同じでないと、万事不安のようであります。また社会の諸組織が縦割りになつており、横の連絡が不十分で境界領域の研究が困難であります。産業の高度成長のかけの国民生活の不安も、独創に耽けることを妨げたかも知れません。以上の諸点をよく考え合せて、当協会も我国の科学技術の独創性の育成になんらかの寄与をしたいと考えています。上記の「対話のある協会」、学際研究の組織化、海外の製鉄所や研究所との接触に依り、思考の多様性に関する刺激を受けることも一つの手段と考えます。

(7) わが国の鉄鋼業の高度成長の一つの要因として、従業員の低賃金があげられた時代がありました。今日ではそれは当りません。従業員の素質が優秀で、教育程度の高いことが日本鉄鋼業発展の大きな要因であることは、海外でも等しく認めている所であります。

外国では宇宙工学、原子力工学、航空工学などの新しい技術が若い人をひきつけ、鉄鋼業に人材が集らないとの嘆きを聞きますが、幸にしてわが国では依然として若い人の魅力の対象であります。これは鉄鋼業が絶えず技術を革新し、科学の最尖端がここに集中し、その生産も世界に稀な高度成長をつけている活気が若人を招くのでありましよう。いかにしてこの魅力を持続して若い人の関心を集めるか、鉄鋼に志す人々の教育はいかにあるべきか、これはわが国の鉄鋼業にとつて最重要の課題の一つで、当協会の教育に対する努力は高く評価されるべきでありましよう。

(8) ある外人の説に依りますと、工業界において、鉄鋼業界の人たちは大変仲がいいことで定評があり、これは世界中で共通に言えることの由であります。私も当協会内でいつもそれを感じて参りました。日本鉄鋼協会の全会員の皆様が今後ますます協力されて、わが国の鉄鋼の科学技術の進歩のために健闘されることをお祈り致します。

会長就任にあたり、所感の一端を述べてご挨拶と致します。